

系統的な同和教育をめざして ～低学年における同和教育のとりくみ～

人権教育部会では、11月に香美町で、小学2年生を対象に『つらいことあるねんな』（奈良県人権教育副読本「なかま」）の教材を使い、「低学年の段階からどのように同和教育を学んでいくのか」というねらいで授業研究をおこなった。この教材との出会いは、昨年度の県教研で川西川辺教組の方がとりくんでいた『ツツル』という活動を聞いたことから始まる。『ツツル』活動とは、自分の想いを自分の言葉で本音を「綴り」、自分を解放していく、教室を誰もが本音を話せる安心できる場所にするためとりくんだ実践で、日記活動を通した学級づくりである。この実践発表を聞き、子どもたちが自分の想いを出し合うことができ、教室を安心できる居場所にしたいと思い、4月から日記を通した学級づくりにとりくんだ。しかし、なかなか子どもが本音を出せるような日記指導ができずにいた。そのような時、富田稔さん（人権教育部会協力研究所員）からの提案で、この教材と出合った。授業計画を考えている段階で、クラスに大きな変化が現れた。なぜならこの教材の活用方法には大きく2種類の用途があったからだ。一つめは、この教材を手掛かりに学級に存在する問題を考えること。二つめは、この教材を使って集団づくりの原則を確認すること。私が担任しているクラスは、10人に満たない少人数クラスで、保育園から一緒に仲が良い子どもたちである。しかし、相手に対する固定的な見方が強く、「この子はこういう子」と決めつけて接しており、そのことが原因で「みんなの前で発表することが恥ずかしい」という子や失敗を恐れて挑戦できない子、特定の友だちに対して執拗に注意をする子がいた。また、年度初めに転入生（Aさん）が加わったが、なかなかクラスに入れずにいた。少人数ということもあり大きな問題も起きることなく、学級づくりをすすめていた。しかし、教材研究をすすめていく中で、クラスの問題点に気づくことができ、仲間との関係や家庭での人間関係まで考えて学級づくりをすることができた。そんな中、Aさんがクラスに入りにくい理由を担当から話すと、他の子たちが口々に「私も家でこんなしんどいことがあるんだ」、「僕も授業が退屈だと思うことがあるよ」と自分の想いを出し合う場面が見られた。その日からAさんにとって教室が居心地のよい場所へと変わり、クラスに毎日入ることができるようになった。

研究協議では、富田さんから「部落解放教育（同和教育）では、自らを解放していく必要がある。困っている仲間を放っておけない、仲間どうしでつながることで解決できるという感覚を低学年から体験させる必要がある」と助言をいただいた。部落問題の教材を扱うにはまだ早い発達段階でも、部落解放にむかう小さな芽に水や肥料を与える役割をしなければいけないと強く感じた。参加者からは「県教研で『ツツル』に出会えたこと、そして、この教材に出会えたことが教員としての変わりめになりましたね」、「先生がクラスの子どもに寄り添う姿を子どもが見て育っている」という言葉をいただいた。

また、授業後の道徳での学習にも大きな変化が現れた。いじめを扱った教材で授業をしたときに「どうしていじめをしているのだろうか」、「何かこの子にもつらいことがあるんじゃないか」という意見が子どもから出てきた。昨年度まで人権教育部会が研究していた「人権の視点を大切に道徳」というねらいにも迫ることができたように感じた。一つの教材に出会い、それが子どもたちとむき合うきっかけとなり、差別解消の第一歩である「なかまづくり」をすすめることができたことをうれしく思う。

人権教育部会ではこれから中学年、高学年とどのように系統立てて同和教育を学んでいくのかを研究していく予定である。

